



渡辺 賢治

漢方シリーズ ⑥

漢方の効能は温泉と同じ？

例えばあるメーカーの「八味地黄丸」を例に取る。「疲労、倦怠感著しく、尿利減少または頻数、口渴し、手足に交互的に冷感」と熱感のあるものの次の諸証…腎炎、糖尿病、陰萎、坐骨神経痛、腰痛、脚気、膀胱カタル、前立腺肥大、高血圧とある。確かに温泉の効能書きの

本年度も漢方医学の講義を学生に行った。何を教えるかについては現在日本東洋医学会、日本医学教育学会で盛んに議論されているが、医師の7割以上が日常診療に漢方薬を用いる時代である。実践的な漢方薬の使用法は医師になってからの卒業教育の実践の場で行うことが好ましい。むしろ、学生時代には漢方の基本的考え方を学ぶことの方が重要である。なぜならば西洋医学のシステムの中で漢方薬を使うことは、もはや漢方医学ではないからである。

学生講義の最初に漢方の能書を見せて、西洋医学との相違について議論をする。学生はいろいろなことを感じるものがある。中でも傑作だったのは漢方薬の能書を見て「温泉の効能と似ている」というのである。

ようにありとあらゆるものが何の脈絡もなく並べられているようである。よく見ると病名の前に「こんな人」という説明がある。これがいわゆる「証」のしほりであり、個人差を重んじる漢方独特のものである。その次にはありとあらゆる病名

が並べ立ててあるように見られるが、これら病名は漢方医学の古典的考え方に沿って後から病名が加えられたものであり、漢方医学的には「腎虚」の病態として一貫しているのである。「腎虚」といっても、臓器としての腎臓とは何

にいえばこれら一見何ら関係のない臓器に起こる変化が「腎虚」という共通病態で説明できるのも漢方の特徴である。臓器ごとに病変を見つけて薬を投与していく要素還元論的解釈では複雑系である人体を理解することは時に困難を感じる。人間の体を包括的に見よう、というのが漢方医学の一貫した哲学である。また、ある学生は漢方薬と西洋薬の違いを「太陽と北風」に例えた。漢方薬には体を温めて活性化しようとするものが多いのに対して、西洋薬は体を冷やして毒を除去こうとするものが多いというのだ。これもなかなか言い得て妙な表現である。痛み止めにしても日本では痛みを止めるのに対して、米国では「pain killer」である。痛みは患者であるからそれを殺

す、という発想である。しかし、痛みにしても熱にしても生体の防御機構であって、そのものが悪いわけではない。熱を例に取るのであれば、ウィルスを排除するために生体機構を使って発熱をしているのである。しかし、欧米では赤ちゃんが発熱を出す水風呂に入れる習慣がまだ残っている。熱性痙攣を繰り返す子には有効かもしれないが、生体防御機構には反しているように思える。なぜならウィルスは熱に弱いので、熱を出すことはウィルス排除を早めるための合目的機構だからである。内科・小児科領域でライ症候群や急性脳症で非ステロイド抗炎症剤の使用が控えられたのは記憶に新しいが、西洋医学が漢方的発想に近づいたことを感じたいものである。